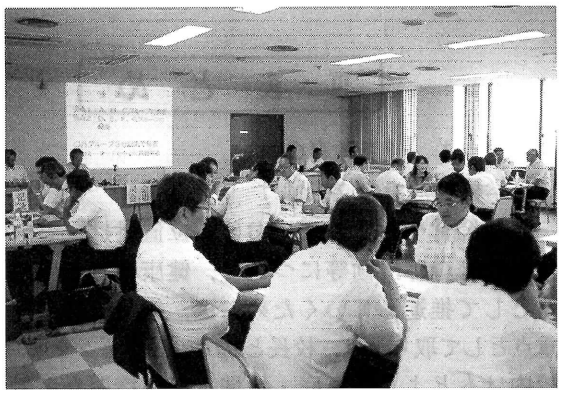
第11分科会　環　　境



研究課題

自然環境を大切にする心と実践力を育てる環境教育と校長の在り方

Ⅰ　趣　　旨

現代は，行き過ぎた経済中心の価値観や人口増加によって地球規模で環境破壊が進むとともに，科学技術のめざましい発展により，自然への畏怖・畏敬の念が薄れていることは否めない。また，子どもたちの現状を見ると，ＩＣＴに囲まれ人工物にあふれた生活が当たり前のようになっており，自然との関わりが希薄になってきている。

また，教育基本法や学校教育法においても，「生命や自然を尊び尊重すること」や「環境保全に寄与する態度を養うこと」が明示されており，環境・防災・エネルギーなどの現代的諸課題に対応していくためにも，自然環境の維持と人間生存との調和を図ることは一層重要となってきている。

そのため，私たち校長は子どもたちに，「自然との触れ合いの中で育つものを大切にすること」や「人間も自然の中で生かされる生命体の一つであること」を具体的に学ばせ，「自然とのかかわりの中で共に生きる心や態度」を育成していく必要がある。

この分科会では，子どもたちに『自然環境を大切にする心』や『環境保全のため主体的に行動する実践的な態度や資質・能力』を身に付けさせるために，「教科・領域等の関連を図った環境教育の推進」と「多様な体験的な活動を通した実践的態度の育成の充実」という視点をもって，学校全体で推進していく上での校長のリーダーシップについて議論し，具体的な方策を明らかにしていきたいと考える。

Ⅱ　研究発表及び協議

1　研究発表

「地域素材を活用した環境教育の推進と
校長の役割と指導性」
胆振地区　苫小牧市立美園小学校　羽田野　勝弘

(1)　苫小牧市校長会の研究

苫小牧市校長会では，市内における環境教育の現状を確認したところ，全ての学校で環境教育の全体計画が作成されているものの，環境教育の「環境保全のための主体的に行動する実践的な態度を育成する」という目的をもって実施されている教育活動は，一部の学校にとどまっていることが分かった。そこで，市内24の小学校を視点別に12校２つのグループに分けて，現状の実態調査をより詳細に行うことで課題を明確にし，継続課題の解明に向けて研究を進めている。

(2)　研究計画

１年次～研究体制と研究内容の確認，実態調査による現状把握，結果の分析と課題の明確化

２年次～課題解決に向けた実践の改善・深化，研究のまとめと今後の方向性（本年度）

(3)　研究内容

①調査研究

- 学校経営の重点や重点目標への位置付け
- 全体計画や年間指導計画の整備
- 環境教育の推進組織
- 環境教育の内容
- 連携している関係機関や団体
- 環境教育を進める上での課題

②結果分析研究～２つの視点における課題の共有化

③実践研究～２つの視点によるグループ研究

(4)　研究実践の状況

１年次目の視点に沿って調査した結果から明らかになった課題について，グループ内各校の全体計画や組織図など資料を持ち寄ったり，体験活動の実践交流する中で，校長のリーダーシップの在り方について検証を図った。

①「教科・領域等の関連を図った環境教育の推進」の視点グループの取組

ア　環境教育の全体計画に環境教育の目的や自校の目標，発達段階，各教科と領域との関係を明記している。

イ　校務分掌組織に『環境部』を位置付けている。

ウ　学校評価における教職員の自己評価や保護者アンケートに環境教育を位置付けて改善している。

②「多様な体験活動を通した，実践的な態度の育成の充実」の視点グループの取組

ア　市環境衛生部で行っている「053(ゼロゴミ)大作戦」を利用して講師を依頼し，ごみの分別の仕方や４Ｒ(リフューズ・リデュース・リユース・リサイクル)について学習している。

イ　ビオトープを校地に造成し，その観察を通した活動を進めている。

ウ　四季に合わせ,「ビオトープだより」を発行し，観察の意欲付けを行っている。

(5) 研究の成果と課題

①成果

ア　本研究に取り組むことによって，校長自身が環境教育について見識を深め，教科・領域を含めた年間指導計画の作成へとつなげ，教職員の意識を高めることができた。

イ　年間指導計画を作成することで，環境に関する教育活動を教科や領域に関連付けて取り組むようになり，発達段階を踏まえた心や実践的な態度の育成を意識して指導する契機となった。

ウ　市内各校と実践交流したことで，各校の取組を知り得たり，自校の取組の改善や充実を図ったりする機会となった。

②課題

ア　保護者・地域との関わりをもって取り組む学校が増えてきているが，まだ学校での教育活動にとどまっている。家庭でも実践できる力の育成が必要である。

イ　環境教育に関する全体計画や組織の構築については進んでいるが，そこに位置付けられている体験的な活動を保障する時間や予算を確保することが必要である。

ウ　自然を大切にする心や実践力の育成には，小中学校と連携して進めることが重要である。

2　研究協議

道小の第11分科会のリーダーシップの視点（上述の（４）の①と②）を受け，調査・研究を進めてきた苫小牧市校長会は，次の点について提案している。

視点１より

●環境教育に関わる取組と関係する教科や領域の整理等→全体の共通理解につながる計画や組織の改善を推進

●実際の取組内容を，学校の評価項目に位置付ける等→実践のマンネリ化を防止

視点２より

●各学校の実践例や地元で協力可能な関係機関等との情報交換→体験活動の充実と関係機関等の選択肢の増加

●地域素材の活用や発達段階に応じた地域・家庭と連携した実践→日常の環境保全に繋がる実践的態度の育成

苫小牧市校長会による提言発表から討議の視点を２つに絞った。そして，７グループ（Ａ～Ｇ）に分かれ，視点に沿って，グループごとに討議が行われた。前半の討議では各校から持参した分科会の視点沿った資料の説明・質疑を中心に，後半の討議ではＡ～Ｃグループはグループ討議の視点の（１）を，Ｄ～Ｇグループは視点の（２）について話し合った。その後，全体討議の中で，各グループからキーワードを中心にまとめたシートを実物投影機を使い，課題解決の方策等について発表しながら，意見交流を行った。

○グループ討議の視点（研究課題解決の視点）

(1) 校長として，学校全体で環境教育の位置付けを明確にし，その取組に改善を加えていくために，果たすべき役割と指導性の究明ついて

(2) 校長として，学校だけでなく，地域や専門機関等と連携し，環境保全につながる環境教育をマネジメントするために，果たすべき役割と指導性の究明について

○各グループの討議から

上記２つの視点について，グループでまとめられた内容と意見交流の一部を紹介する。

（環境教育の位置付けと取組の改善）

- 環境教育の構想を，具現化する組織や仕組みをつくり，その内容を職員に浸透させ，活用させることが必要である。
- 教師や子どもたちに目的を意識化させることが大切である。そのためには，ＲＰＤＣＡが必要である。
- 環境教育を通じて，教科等の多面的な教育活動につなげていくことを考えて行く必要がある。
- 全体計画の策定に当たり，具体的な方向や方策，体制づくりを明確にして職員に周知し，保護者・地域にも明らかにし，説明責任を果たすことが大切である。
- 環境教育の推進に当たり，分掌への位置付け，取組の記録化・蓄積・活用，素材の開発・改良，地域や外部人材との関わり・連携・評価が重要になってくる。（地域や専門機関等との連携及び環境教育のマネジメント）
- 環境教育は三者（家庭・地域・学校）をつなげるツールとして有効であるとの認識をもつことが大切である。
- 環境教育の取組を価値付けることが大切である。
- 計画の策定から職員を参画させ，意識を高めてから組織づくり（例：地域担当）を行う方法もある。
- 常にアンテナを高くして，地域との人脈づくりが新たな地域素材や人材の発掘につながっていく。
- 日常の環境保全活動（体験活動）の充実を図ったり，小中連携等の場づくりを設定したりすることが必要である。

・環境教育の取組をメディア等を活用して公表し，地域等に理解を得るような手立てを講じることが大切である。

Ⅲ まとめ

1 教科・領域等の関連を図った環境教育の推進

環境教育を進める上で，課題として「指導時間の確保」，「教員の理解不足」，「推進体制や組織の未整備」，「予算」等の課題が挙げられる。このことは，どの学校にも当てはまることである。しかし，校長が，環境教育の必要性を職員に明確に説明したり，学年の系統を意識した環境教育の年間指導計画を整備し，教科・領域等と関連付けた時数を生み出したりすることができれば，これらの課題は小さいものとなる。

ただし，校長がどこまで示すかということは課題の一つと言える。トップダウンで，校長が推進体制や組織を含め細かな具体策を提示することも考えられるし，ミドルリーダーを育てる意義から，主任クラスに具体策を考えさせる方法もある。

もう一つの課題は「検証」である。いつ・どのように実施し，それをどんなふうに提示するかである。提言にもあったように，環境教育の活動を学校評価項目に入れることは，取組のマンネリ化を防ぎ，改善を図る上でも有効である。教職員だけではなく，保護者や協力してくれた関係機関との共有の在り方も考えていかなくてはならない。

人はどんなにその仕事が忙しくても，その効果があらわれれば，その「多忙感」は「やり甲斐」に変わる。私たち校長は，教師や保護者，地域住民とともに「やり甲斐」を実感するために，「どうしたら実現できるかを考える力」を磨くことが求められている。

2 多様な体験活動を通した実践的な態度の育成の充実

本視点においても，やはり環境教育の「年間指導計画」の整備が重要となってくる。なぜならば，教科・領域等と関連付けた体験的な取組の目的が明確であると，教師にとって指導する道筋が見え，発達段階を踏まえた心の育成や実践的な態度の育成を意識でき，家庭や地域と連携した具体的な取組の実践化も図ることができるからである。

自校の環境教育の改善や充実を図る上で，体験的な活動の開発・改良を含め，他校の実践例や協力可能な行政機関・民間団体との情報交換が必要である。その際に注意しなければならないのは，活動が目的化しないためにも，活動がしっかりと学びにつながるよう，自校の環境教育の目標に照らし合わせて体験活動を選択することである。

私たち校長の役目は，その活動によって目指す子どもの姿を明確にし，説明責任を果たすことで，地域をはじめ，ＮＰＯや企業等の様々な関係機関と連携したり，コーディネーターの役割を果たしたりすることである。また，校長は，目の前にいる子どもたちに将来にわたって必要な資質・能力を獲得させるために，家庭や地域に対して，「学校はこれをやる」「家庭ではこれを」「地域はこんなお手伝いを」と，お互いの役割を明確に示していくことも必要である。さらに，環境教育を継続的に，または小・中連携して推進していくためには，市町村全体であるいは校長会として意思統一して取り組むことが鍵になる。

3 結びに

小学校時代に自然と触れ合った原体験は，大人になっても忘れないものである。したがって，自然環境の中で豊かな体験活動を味わわせることが，『自然環境を大切にし，環境保全のため主体的に行動する』子どもたちを育成する素地になる。

私たち校長には，①組織のため自分を犠牲にできる②忙しさや課題を仕事のモチベーションに転化できる③人をやる気にさせ，人を動かすことができる④人々の生活を豊かにしようとするビジョンをもつことができるといった自らが触媒となって組織内部に変化を起こすプラチナリーダーとしての資質が求められている。そして，これからも校長自身が努力し続ける姿を示していくことが大切である。

「第11分科会に参加して」

洞爺湖町立とうや小学校　山　下　文　人

本分科会では最初に，分科会の趣旨について，映像を使っての説明があり，環境教育が問われるようになった背景や現状が分かりやすく伝えられました。

次の研究発表では，苫小牧市校長会から，環境教育を進めるに当たっては，その重要性を再認識し，リーダーシップを発揮しながら組織や指導計画を整備させること，そして，実践的な態度の育成を図るため，保護者や地域との連携が不可欠と発表されました。

グループ協議では，まず，持ち寄った資料をもとに，地域の実態が違う中での様々な実践交流を行いました。

そしてその後は，校長の在り方について究明すべく各グループに割り当てられた協議の柱に沿って話し合いを進めました。それにより，自然環境を大切にする心や環境保全のため主体的に行動する実践的な態度，資質・能力を育てる環境教育の推進方法について，さらには，家庭・地域・関係団体との連携による体験活動を充実するための具体的方策について，非常に熱心な議論をし合い，多くの示唆が与えられました。全参加者が大きな勇気と意欲をもったと思います。私も感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。